

汎美術協会会員便り

Vol. 37



汎美

2016年3月

発行・汎美術協会事務局

目次

代表になってしまった	汎美術協会代表 吉田敦彦	1
汎美！ これからの挑戦	汎美術協会事務局長 中西祥司	2
伝統ある汎美展	前 汎美術協会事務局長 田中準造	3
思いつくままに・2015年秋	吉田敦彦	4
テニュウ ヲ ホユウシ…ギョメイギョジ	保倉一郎	9
まぼろしみなど	塩沢慎介	11
まぼろしみなど取材記	塩沢慎介	12
研修報告	研修係	14
平成27年度汎美研修会に参加して感じたこと	相京三千代	14
これからの美術館事典をみて	島田隆一	15
「NO MUSEUM, NO LIFE？」		
これからの美術館事典」を観て	中西祥司	17
NO MUSEUM, NO LIFE？ これからの美術館事典		
国立美術館コレクションによる展覧会を見て	大谷敏恵	19
雑感 -8月7日の研修会に参加して-	高木須美	19
8月7日の研修会	三竹康子	20
「これからの美術館事典」を観て	久保 進	21
会員より 一言・二言・三言…		
空間の中に放たれる造形	久保 進	21
描き始めてまだ…	小林勢津子	22
入会4年目で感じていること	新海 進	23
私の絵心	吉澤浄子	24
春秋遊吟 抜粋	愚聰風 大辻敏成	25
編集後記	編集係	26



代表になってしまった

代表 吉田 敦彦

もう 40 年になるのですね。ある日突然境という人から電話で呼び出されて汎美展の再興にかかわることになってから。40 歳だったから出来たとは思いますが、あの裁判に訴えてまでして都美術館の会場獲得のために働いた一年は無我夢中でした。その後おおはし代表と境事務局の 20 数年間にわたって事務局の片棒を担いで来たので、もう一切お役御免と思ひ裏役に回ってお手伝いに徹してきたのですが、80 歳になるという今になって代表になってしまった。老化の波に攻めたてられている現状では、いやはや、まだ何かお役に立てるのかしらと不安の方が先に立ちますが、何とか責任だけは果たしたいものだと思います。

なんにしても汎美は良い会ですから。都美術館と新美術館に会場を得ている数ある団体の中でも、こんなに住心地の良い会は他にないのではないですか。出品作に対する審査がないし展示位置も公平に抽選順に基づいて決めるから、上下の人間関係ができず、みんなが対等の立場で話し合うことができるということの大切さ。これだけは守っていきましょうね。少数の人が引きずっていくような会とは全く異なった、民主的で明るい雰囲気を守ること。それはみんなが力を合わせていかねば守れません。会員及び出品者の全面的なご協力の上に成り立っていることを忘れないでください。

幸い以後 6 年間は展覧会場が確保されていますからその点は安心ですが、会の内部の問題にはだいぶ切実なものがあります。出品者と会員を増やすことと汎美展のレベルアップの問題などです。しかしこれも新事務局が積極的に動き始めていて下さっていますので、信頼してできるだけの助力を惜しまないようにして行きたいと思います。会員諸子のご協力も切にお願いいたします。この会は少数の人に支配される会ではなくて、みんなが対等の立場で知恵と力を出しあって進めていく会です。

展覧会を主宰するのが目的の美術団体ですから、展覧会の作品群の充実こそ最大の目標でありましょう。その意味で展覧会の開催の時に一番うれしいのは、誰かさんの作品に積極性を感じ、前回より良い方向に向かっていると感じる時です。幸いこれまではいつもその喜びが多い会でした。ぜひ今後もそれぞれの個性を生かしながら、それぞれが良いと思える方向へ一歩でも半歩でも進んで行っていただきたいと思います。表現の自由を保障している会ですから実験も良し、より深い追及も良い、積極的に進めていただいて、それぞれが「描きたいと思うものを描きたいように描いて」いってください。

絵画を自由に描けてそれを同じ思いの仲間とともに発表できると言うことの、喜びと意味と価値を考えてみてください。より良い人生の充実のために。

今年も一年、実り豊かな年にしていきたいものです。

2016年春

汎美！ これからの挑戦！

汎美術協会事務局長 中西 祥司



●事務局長就任にあたって

大野さん、長い間ご苦労様でした。大野さんの仕事ぶりを見聞きし、大変な仕事だと実感していました。事務局長を引き受けて欲しいとの話があった時に、とても大野さんと同じようには出来ないと躊躇し、考えさせて欲しいと返答しました。1週間ほど考えた結果、引き受けるとしたら、仕事を分担していただかないと無理と返答し、大野さん始め、会員諸氏にかなりお手伝いいただくことをお願いしました。今後、さらに負担をお願いしていく予定です。私は2011年に入会で、経験不足、会に対する知識不足など、多々、不満足な事柄が起こると思います。そのようなことも含めて、よろしく申し上げます。

●汎美術協会・汎美展のリ・ブランディング

入会以来、運営委員会や総会での議論、また皆さんの問題意識、話を聞くにつれて、会の存続や発展、展覧会を継続して実施することはなかなか難しいことだと実感してきました。高齢化が進む他の公募団体も同じだと思います。

いろいろな問題があると思いますが、一番大きな問題は、継続して作品を制作する若手作家の減少であり、さらに公募展が作家にとって成長していくための活動の場としての必要性、重要性が限りなく低くなったと思います。などなど、時代のニーズに合わなくなった公募展の存在意義が問われていると思います。美術館にしても、その存在価値が問われていると思います。

汎美術協会、汎美展も基本理念を守りながら、時代のニーズに合わせて、新たなアイデアを取り入れて、どのように活動していくか？

どういう方法で、汎美をアピールし、この状況を乗り切っていくのか？

広告代理店の仕事をやってきた習性でいうと「汎美術協会・汎美展のリ・ブランディング」の作業をすることだと考えています。

それを進めて行く方法として、先の運営委員会で「会員を増やそう会」を立ち上げました。有志が集まって頂き、重要な課題を集中して議論し、具体的な実行可能な提案することとしました。

今までの反省として、話は盛り上がっても実行されないことが多々あったと。慎重に議論し検討し、時間をかけてやってこられたのだと思います。しかし、現在の私たちの置かれている状況は待ったなしです。改革を迅速に進める必要があります。新しい改革案、企画に対するチャレンジは、多少のリスクであれば、やらないよりはやった方が良く、チャンスがあればその可能性にかけるべきだと考えています。やり直しが可能なことはまずやってみる、そこで問題が発生すれば、そこで問題を修正していく。最近よくPDCAサイクルを回していくと言われますが、それが重要なことだと考えています。

●すでに動き出したこと

ITを活用したPR,コミュニケーションの活性化を図っています。汎美のホームページの改善を図ることはお知らせしている通りです。それに加え、フェイスブックを起

ち上げました。木虎さんが作業を担当。汎美事務局用FBは基本的に事務局から会員への情報を伝えます。汎美会員用FBは会員相互の円滑なコミュニケーションのためのものです。一般の方もみることが出来ます。ブランドイメージを構築する上で非常に重要な役割を果たすものと考えています。まだ、試用段階ですが、実際の運用を想定しながら、コンテンツを掲載しています。FBができる会員は両FBに友達申請してください。

汎美・小品展を企画しました。汎美を銀座、京橋界隈で活動している作家、業界関係者に対するPRと会員の特典として、小品を出品する機会を提供するものです。今回は4月11日～16日まで、京橋のギャラリー檜B、C開催しますが、39名の会員から出品希望があり、出品する予定です。開催に向け、いろいろ仕事の分担をお願いしていますが、よろしくお願ひします。

ブランドイメージの構築にデザインは重要なエレメントです。一気に変えるのは時間と予算の問題で厳しいので、出来るところからチェンジしていきたいと考えています。まずはホームページや案内はがき、チラシ、封筒、展覧会エントランスなど実施していきます。

広告掲載を「美術手帳1月号」から「芸術新潮1月号」「美術の窓1月号」に変更しました。芸術新潮3月号のArt coffeeのコーナーに2016汎美展の紹介記事が掲載される予定です。

その他、運営委員会などで報告させていただいている通りですが、会員諸氏のご意見を反映させ、いろいろな改革案に取り組んでいきたいと考えています。汎美術協会を運営、発展させるためには、会員全員のやる気と行動力が必要です。アイデアを出し、自分たちで実施していくという強い思いで、ご協力をよろしくお願ひします。

伝統ある汎美術展

田中 準造

長い伝統ある汎美術協会は、多く先輩や現在の皆様一人一人の協力精神に支えられて活動してきました。当初から個人の表現を大切にし、更に、抽選によって展示位置を決め、出品者全員による展示会場づくりをする会は、他には見られないと思います。特に、ここ数年の受付の仕事・展示作業は、本当に皆様の意識と行動力によって改善されてきました。

さらに、作品に対する自己主張が、それぞれに表現を工夫された作品として見られるように成りました。これもひとえに皆様の向上心の表れと思われまふ。

我々は、小さい会ではありますが、日本の美術界でも特色ある美術団体です。

これからもそれぞれの立場で、健全で明確な主張を持った会にして行きますよう。

ここで、私の作品について一言。途中まで書いてきてふと思った。このような手順は、誰しものがやっていることと思う。しかし、写生に取り組むパターンもいろいろあると思うが、あえて書いて見ることにした。

素材が写生でも自分の思いを人に伝えたい・その為にどんな表現をすれば良いか考える。そこに表現したい主張・思いを留めておきたい感情が出てくると思います。私は、風景を油彩で表現していきたいと思っています。いろいろな風景があるが、その中で自分の思いを表現出来る素材(風景)がどこにあるか。また、風景を見つけていて感動し表現して・鑑賞される方に作者の思いを伝える要素があるか・どうかを考えて表現の構想に取り組みます。私は、先ず現場を探して、いくつかの角度から「スケッチ」をします。その時々、その場の空気・風・臭いを感じながら描きます。この行為を大事にします。更に、パステルで対象の形・色を感覚的に捉えてスケッチをします。

その場で大まかな構成を考えておきますが、家でキャンパスに向かって、スケッチを素に構想を練ります。そして、一時的に大まかなデッサンをします。更に、デッサンを修正したり・時にはキャンパスを換えたりもします。着彩は、描き込んでいく順・つまり色を重ねていく効果を考え、全体的に下地になる色をおきます。そして、先ず主題になるモノから描き込んでいきます。次に、主題を支えるモノを描き込んでいきます。この時、注意したいことは、重ね塗りの効果、マチエルの効果などを考えて描き込んでいきます。これは、皆さんは、やっていないことだと思いますが、高校時代に教えて貰ったことですが、天地・上下を逆さにして見ることをします・画面の中の空間感を見る作業です。このようにして、描き込んでいくのが、私の制作過程です。特別な事ではないと思います。たまに、こんなことをして見るのも良いものですね。

思いつくままに・2015秋



吉田 敦彦

現代の怪談?二つ。

その1

先日の秋季展の搬出前の運営委員会で、展示位置の調整に関して、抽選順を安易に変えるべきではないとの提言の際に、大野さんから、10年前の汎美展の展示の翌日に悪性の胃癌で亡くなられた、汎美展再興時の功労者でその後20年余り事務局長を続けられた境さんの亡くなられた時の話がありました。ここではそのことに関して私の経験した不思議なことなどを書いてみます。

先ずはお通夜の席上で奥様からうかがいましたことから。

そのお話では、亡くなる前日、つまり我々の展覧会の初日、境さんは夢うつつの間にあって幾度も「展示順が違っている」とつぶやいたそうです。その日が汎美展の展示の日であり、汎美にとって一番大事で忙しい日であることを、きちんと記憶しているのかと思うのですが、それだけでも不思議なことではないですか。毎年この日を待ちかねるようにして会場に行くことが、身体にしっかりインプットされていたのでしょうか。それまでも、長い昏睡状態の合間に一瞬意識を回復されるときがあつて、そのときはいつもと変わらぬ対応があつたとのこと。これは多くの場合癌の症状の特徴の一つのようですが、意

識は最後まではっきりしていたようです。「展示順が違っている」ということは、彼から見ての汎美展の最悪の状態「抽選による公正な展示位置の決定と言う、大事な原則が踏みにじられた状況」を夢に見ていたのではないかなどと想像します。あるいは魂魄が汎美展の会場をさまよっていたのかも。結局無事展示が終わって懇親会までの「初日」の過ぎるのを待っていたかのように翌日亡くなられました。

その初日の朝、私は奇妙な体験をしました。いつものように6時半頃起き出してすぐアトリエに行ってその雨戸を開けたのですが、突然背後でクラシックの音楽が鳴り響き始めたのです。振り向くと部屋の隅においてある古いラヂオ、テープ、CD 一体型のステレオ装置が歌っているのです。スイッチを入れた覚えも無いのになんだろうと思って、スイッチを切ると少し黙りますがすぐまた歌いだします。アンプの表示を見るとウエークアップタイマーが作動していると出ていたのですが、こんなものは購入してからこれまでの十数年間一度も使ったことの無い機能です。それでもいつか誰かが間違っても設定していたものが今急に息を吹き返したのかもしれないと考えて、マニュアルを探し出して設定の解除を試みましたが、どこをどういじってもだめでした。やっと消したと思ってもまたすぐに歌いだすのです。はてなまてよと気がついてみると、ウエークアップなら内蔵の時計が設定されていなければならぬはずなのに、その時計機能そのものが購入の最初から使われずに忘れ去られた存在でした。その上、ちょうど私がその前にいる時刻を狙ったかのように作動すること自体、おかしいではありませんか。結局電源コードを抜いてやっと黙らせることができました。そして翌日の朝からはこの機械は今までどおりに作動し、なんの変調もないのでした。

さらに奇妙な体験は続きます。その日は会場当番の日でしたから、何らかの緊急の連絡の入る恐れもあると考えて、出かける前に、買ってはみたけれどその頃はまだほとんど使っていなかった携帯電話を取り出し、電池の状態を見ようとスイッチを入れましたら、突然懐かしのメロディー「ラブミーテンダー」が賑やかに鳴り出し、ディスプレイにはピンクのハート模様が踊りだしたのです。いつもならチャランと言う音だけで入力画面に変わるのに、その日はいつまでもその音楽と画面が繰り返し続きます。電源を切れば消えますが、入れればまた同じこと。このときもまたいつか誰かがいじった結果が、今出たのかなと思いました。結局、そのまま持って出て翌日また電源をいれてみると、もう平常に戻ってチャランだけ。あれはいったいなんだったのでしょうかね。

変な音と言えはまああったのでした。数日前にさかのぼりますが、ちょうど境さんの容態が悪化したらしい2月下旬の頃の朝のこと。起きて洗面所兼脱衣所で顔を洗うべく水道の蛇口をひねったら、どこか別のところでゴボゴボと水の流出する音が響くのです。我が家の水まわりがこんな音を立てたことは無いはずだがと、不審に思って浴室の方を覗くと、浴槽の湯の噴出口からぼこぼこ音を立てて湯が出ている。誰かが間違っても、使ったこと

何の表示も出ていません、電源すら入っていない。それでもぼこぼこ湯が流れ出している。仕方が無いから、いったん電源を入れてあらためて切りなおしたらやっと止まったということもあったのでした。

いずれも機械のことですから、何らかのまちがいで誤作動が起きる可能性は無いとはいえない。しかしこのような短期間に三つの機械のそれが集中して起こること「しかも丁度私の居るときに」は考えられません。確率の問題として考えてみれば、多分天文学的な数を分母に持つくらいの確率ではないのかと思います。

それに引き換え、元電電公社員でその業務内容から機器の類に詳しかったはずの境さんが、無意識のうちに自らの肉体を離れて、ちょっと遊びに来たとかいたずらを仕掛けてきたとかで、訪れたとか考えるほうが順当な気がします。その数日前に大船の病院で最後にお会いしたとき、昏睡状態から遂に覚めなかった夕暮れの彼の病室の情景を思い起こしながら考えました。こう言いうのを超常現象と言うのではないですか。

ある方が外出先で、事故で亡くなったときにその方の家の玄関の扉が突然開き、次々と戸や襖が開き、最後にその方の部屋の扉が開閉して終わったという話が、司馬遼太郎さんのエッセイの中にあつたことなども思い出しました。

かつて高奥君と寺門君と言う二人の汎美の若手の希望の星を、一度にそれぞれ状況不明の不慮の事故で失ったことがありました。その時私が描いていた作品の題名が「Requiem (鎮魂ミサ曲) for T.」。制作中になんとなく頭に浮かんだもので、たまたまその少し前に亡くなった作曲家の武満徹にちなんで、彼の世界的な出世作になった曲の名をもじったつもりでつけた題名なのですが、最も制作に熱中し、その題名が頭に浮かんだ日が高奥君の命日であったことを後で知って、不思議の感に打たれたという経験もありました。

そのほかにも私には似たような不思議な偶然の一致の経験がいくつもあり、高校までは理科系と言われ、何事につけ科学的合理的に判断しよう努力してきたつもりで性格に反することながら、ある種の超常現象の可能性も否定できないでいるわけです。いくら科学が進んでも人知の到りえる範囲はまだまだごく小さくて、計り知れない不思議の部分の大きさに対して人間は謙虚であらねばとの戒めとも思ったものでした。

それにつけても私の境さんとの縁の浅からざりしことを思わざるを得ません。それと彼の汎美にかけていた情熱と執念についても。詳しくは今年の「便り」をご覧ください。

その2

梶田さんの物理学賞で、ニュートリノとかいうものが再び話題になっています。「もの」

と書きましたが、このような素粒子を「もの」つまり「物質」と呼んでよいのやらどうやら私にはわかりません。 私たちが生活している日常の世界では、物質が空間の中にはっきり実在していて手で持ったり触ったりできます。しかしその物体の組成のもとをただそうと次々と細分化していけば、分子から原子へそして原子核や陽子や中性子や電子にとたどっていけますが、その先あたりになりますと常識では測りしれない世界になります。スーパーカミオカンデとかなんとかかんとか、膨大な費用と場所を使ってそれらの一番もとになっている素粒子を追い求めている現代物理学の最先端の研究は、一体何を我々にもたらしてくれるのでしょうか。

ある日小耳にはさんだ話では、糊は物と物をくっつけるがそのくっつける力とは何なのかとの問いの答えが、「万有引力」だとのこと。ニュートンとリンゴの話なら、地球が物を引っ張っているから下に落ちるのだというくらいが我々の常識の範囲で、地球の上に立とうが下（裏側）に立とうが落ちこちずにいられる、あるいは地球が太陽から一定の距離を保って回っているのも、この引力とか重力とかいう力のおかげだと言うことは分かっているのですが、その同じ引力で糊が物と物をくっつけているとはと驚きました。しかし考えてみると、それ以外に考えられないことなのだなと納得せざるをえませんでした。

この世に力と言いうものは引力以外に何があるでしょう。思い浮かべえるのは磁力くらいなもの。ここでニュートン力学の「引力は距離の二乗に反比例する。」が思い浮かびます。接着剤は要するに物質と物質の距離を0に近くすることで、物と物をくっつけているのですね。そこで物質が物質であるためにはその分子と分子が0に近い距離にあって、そのそれぞれの引力で結合しあっていることが必要なのですね。そう思って改めて周りを見回せばペンも消しゴムも机も椅子も家も樹木も道も街も畑も海も山も私の体も、すべてのものが重力によって固まった素粒子によってできていることになり、改めてそれぞれの物を見直したい気持ちになりました。

その大もとの素粒子が「もの」と言えるのかどうなのか、誰かさんの話ではそれは実体のないエネルギーの塊あるいは渦巻きのようなものでしかないだろうとか。

話が飛ぶようですが、宇宙の成り立ちの始まりはビッグバンだというのが現在の定説ですが、つまりそれは大爆発が起きて、物質のもとである素粒子がものすごいスピードで拡散していったということ。その過程で素粒子同士がお互いの引力でくっつきあって、原子

や分子が生まれ、星が生まれ宇宙が形成されて行ったと言うのです。

しかしおかしいですね。爆弾が爆発するためには爆薬がなければならない。だとしたらビッグバンの元になるものは何があったのかな。すべての宇宙とその中身である物質のもとになる何かがあって爆発が起こったのなら、話は分かりやすいのですが、困ったことにそうなると、ビッグバン以前に何らかの物質か宇宙が存在していたことになり、その「前宇宙の始まり」は一体何なのかということになれば、それこそ無限に続く堂々巡りに陥ってしまいます。

子供のころ宇宙は無限だと言いう話を聞いた時に、どこまでもまっすぐ進んで行ったらいつかは宇宙の果てにたどり着くのではないか。その果てが壁であるとして、その壁の厚みはどれだけあってその先はどうなっているのか、というような堂々巡りに頭を悩ませた人は結構いるようですね。相対性理論とか4次元世界とか多次元世界とか、宇宙は曲がっていて、例えば球の表面をどちらに進んでも果てがないように、宇宙にも果てがないのだ、ということあたりで何とか納得した覚えが私にはありますが。それと似た堂々巡りに落ち込んで、ハテサテ、結局宇宙の始まりにおいて究極の素粒子は何から生まれたのか、とたどると何のことはない「無」と言う答えしか見つからないことになってしまうようなのですね。つまり宇宙も無から生じていつかは無へ帰るものと。

簡単に書いてしまいましたが、これって一体どういうこと？私自身が究極的には無からできているということになるじゃないですか？宇宙も？自然も？私自身の体も、あらゆる「もの」も結局は……、考えてみると怖い話です。科学的究極の怪談ですね。

さて変な話になってしまいましたが、これもトシのせいですか。つまりは生とか死とかの問題が、我がこととして目の先にぶら下がってくる年ごろになって来ているから、ついこんな方面に考えが進んでしまうということかな。ノーベル物理学賞で一夜また若いころの悩みを思い出しました。たまには、浮世の人付き合いなどの憂さを忘れて、こんな怪談に思いをはせるのも良いでしょう。日ごろは既成の宗教には縁がない身と思いながらも、宇宙を統べている何らかの意思を感じたくなるのもこんな時です。自然の中のちょっとした美しい場面や、精妙な造形を見ても感じるのですが。

追記

二つの話は全く異なったことのように見えますが、どちらも不条理の世界に私を誘いこ

みます。SFのいくつかの荒筋をわたしに話してくれた父は、不条理な世界の話の後でこんなことを言いました。「2次元世界を今食べているサツマイモ（それが主な主食だった時代の話です）が通過する時には、まず点が現れてだんだんそれが大きな円になり、まただんだん小さくなって消えていくように見えるだろうよ」と。3次元世界に住んでいる我々には理解できないことでも、4次元や5次元などの多次元世界とかいうあたりまで含めて考えると、あり得ることになるのだということでした。それから推していけば、我々の命が実在するのかどうかと言った辺りまで考察を進めることもできそうで、死は無への回帰などとあきらめる必要もなくなりそうに思えて来そうですが、いかがなものでしょうか。

ああ、銀河鉄道、君は今どのあたりを走っているのか？

テンユウヲホユウシ・・・ギョメイギョジ 嫌戦少年は迷う

保倉 一郎

テンユウヲホユウシバンセイイッケイヲホコルダイニホンテイコクテンノウハ
アキラカニチュウセイユウブナルナンジユウシュウニツグ・・・コンアカツネ、
テイコクリクカイグンハベイエイニコクニセンセンヲツウタツセシメタリ・・・

小学一年生にこれを暗唱させ軍国少年の意気高揚をはかった愚行は若い皆さんは知らないでしょう。

昭和16年12月8日の朝、病弱で床に臥していた6歳の幼稚園児の私は、早朝に近くに住む番頭に門の外から呼んで起こされた。

「旦那・大変だ！ 戦争だそうです」。女中を含む数名の住込みの若衆と家族7人が飛び起きてラジオのニュースを出して聞き入った。

翌年4月には早生まれの私は「7つ上り」と言う歳足らずの新入生として第一期国民学校一年生になって桐生市立北国民小学校へ入学した。

戦局が進むにつれ、2年生の姉は勤労奉仕で学校から遠く離れた生品の飛行場まで滑走路をつくるための芝草を運ぶために、学校に運び込まれた芝草の束を背負わされて途方に暮れていた。母が芝の土を落として軽くして包み治して出かけて行った・・・

体操の時間に胸を張って歩調をとって歩くと「一郎君、金鷄勲章！」なんて褒められて得意になっていたが、反面、痩せてヒョロ長の少年は色白でもあったからアメリカ人と陰口され嫌な思いもしていた。

家に有った本から覚えた乗り物の図をまねて描くのが好きで、日本の飛行機は全部・アメリカのカーチス・ロッキード・グラマン・ダグラス・・・独逸のメッサーシュミット・伊太利の半双胴の変型機・・・前大戦ではチェコスロバキアの保有機数は世界一で、先進工業国だったが、ヒトラーに進軍されて消えたのを知っていた、ヒトラーの名演説もラジオで聞いてしっていた軍国少年でも飛行機少年でもあった。

教室で皆にかこまれてこれらの戦闘機が空中戦している絵を声上げながら描き遊んでいた。

後でこの絵の米機が街の空に飛んで来ようとは夢にも思わずにいた。

軍人・兵隊さんには向いていないし、なりたくない気持ちが強かった。

この町で織物の図案業を営む父は鋪木清方のもとに伊藤深水に手ほどきされた美人画の愛好者で、母の実家は花柳界とあっては軍国主義になじむ家庭ではない。それを避けた将来を考えるぐらひは子供心にも根強くあった。

勉強して工業高等専門学校へ進んで技師になり、中島飛行機工場へ入り飛行機の設計をすれば兵隊にならずに済むだろう。

戦時が苦境になると、兵隊をまねて、連帯責任を制裁するとして班長が部下を並べて、順に往復ビンタをくらわせた、まさか弱虫な幼な馴染みの保倉が皆に制裁を加えとは自他ともに予想しなかった。奴にやられるとはひどいと、途惑う彼等の恨めし気で寂しそうな顔に容赦なく食らわせなければならなかった、泣きべそ描いて鼻血を流す幼馴染の顔が心に焼き付いて70余年たつ今も消えない思いがある。

大本营発表に戦意高揚し、靖国神社の鳥居を仰ぎ見て祈った

「みごと散ろうよ、国の為！」

東京大空襲から・・・近隣の街・町が灰になり、わが町も突然にグラマンの機銃掃射に襲われて震え上がって畳に伏せた・・・

軍事工場の職人にオシャカだー・オジャンだー・という言葉が流行った。

ついにギョクサイ・ギョメイギョジだーとあいなった。

今日、安保改定に思いをはせる、介護にたよる「年寄り死んでください国の為・・・」

歴史は繰り返し、またいつか・・・ 御名御璽に？

この項 **ギョメイギョジ**

.....

逸記

天佑ヲ深育シ万世一系ヲ誇ル大日本帝國天皇ハ明ラカニ忠誠勇

武ナル決勇衆ニ告ぐ・・・

今晚、帝國陸海軍ハ米英二國に宣戦を通告セシメタリ・・・

まぼろしみなと

塩沢 慎介

幻・十三の海

幻・十三の湊

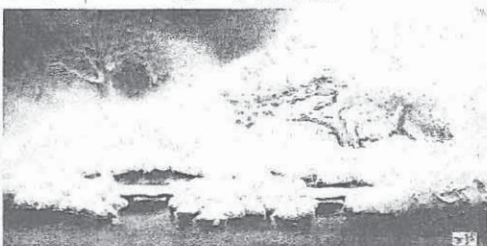
幻・十三の京



220 糶



45 糶



220 糶

絵略説

「幻・十三の海」

中世から時の重なる日本海を航行する和船や中国・元代船。十三湊繁栄の裏には驚くべき数の難破がくり返された。竜骨を持たない和船(舟才船、千石船)は波のねじれに弱く、立派な竜骨の中国船(船長28M、船幅9M、200t)も暴風雨等で沈没した。神のご加護を求め、中空に船の守護神、金毘羅様の御幣が舞い、荒れる白波に無事を祈っておエキは舞う。

「幻・十三の湊」

ヴァルハラに帰って行く船人の生きた証の海と空を見ようとする目には夜の青空も瞥見できる。聞こえる耳には 打ち返す波音に、闇の中からマンガニーズ・ブルーに煌く波形も浮き立ち響く。そんな多くの旅立ちをおエキはこの湊ですっと見送って来た。

「幻・十三の京」

都は西の京だけではない! そんな熱い思いで繁栄をひた走ってきた港湾過密都市、北のまほろば十三湊。何度も戦や動乱はくり返されたが、武家屋敷、町屋、館、城、十三千坊・山王坊にも、雪は等しく降りつもる。やがて全てを包み おエキの茵と化す。

遠い昔からたいそう賑わっていた湊が 一夜にして消えた
風の聞えは「まぼろしみなと」
半年雪敷く北のはて 雪女の茵とよが広がる
旅の衣に乱れはないか 重い空の底 雪女は舞う
をお……お……をお……
悠久の風声が気配の影をつれてくる
紫陽花 春告鳥 遅い春ぬるむ あの頃
金波銀波 出船入船 煌めき重なる あの頃
順風満帆 湊京のいやさかを祈る あの頃
「あの頃 楽しかったネ。」……幼子のひとりごと
純白の茵は包み 抱くように敷かれている
「まぼろしみなと」……津軽十三湊
一夜にして消えた……あのウソは誠まことだったか
紫陽花や きのふの誠まこと けふの嘘うそ
(正岡子規)

2015汎美展 於 国立新美術館

津軽十三湊とさみなとは、まぼろしみなどである。
津軽平野を北上して日本海に注ぐ岩木川。
その河口、十三湖に十三湊はあった。

鎌倉末期、蝦夷官僚として権力を誇った安東氏の
蝦夷交易の中心港でもあった。

その賑わいは全国三津七湊さんしんしちそうの第一に数えられたほどであった。
十四世紀中頃のある日、大津波で湊も町も人も一夜にしてきえた。
栄華の跡にのこったのは、砂と雪と悠久の風・・・
長い間そう伝えられてきた。

※三津七湊

- ①奥州 津軽十三湊 ②出羽 秋田 ③越後 今町(直江津)
④越中 岩瀬 ⑤能登 輪島 ⑥加賀 本吉 ⑦越前 三国
⑧伊勢 安濃津 ⑨泉州 堺 ⑩博多 宇津
①①⑦が七湊 ①⑧⑩が三津

因みに港湾の形態は、泊↓津↓湊↓港として発展してきた。
泊は入江瀉など風波穏やかな船を泊めやすい地。

津は川舟の船着場。湊は泊の発展し船集いたる地。

港は湊栄えて都邑を生じたる地を指す。

しかしこれはウソであった。
大津波などなかった。

近年、国立歴史民俗博物館、富山大学、他の調査で、
遺構に津波跡は発見されず、国史跡にまで指定されてしまった。*

これまで伝承と後世の文献などで語られてきた時の識者達の判断は危うくもくずれた。
とはいえ心優しい賢者先人達のことである。

あまりの惨状に人の責を越えた天変地異としたかったか。
説明困難な未知との遭遇などはどうか。

はたまた・・・。

※学術発掘調査(平成3年～15年)、国史跡指定(平成17年)

日本の地震・津波は、太平洋側では海のプレートが陸のプレートの下に沈んで起きる
が、日本海側では海底活断層が動いて起こる。海底断層は陸に近い
ため津波は非常に早く、巨大となる。

このことは数多くのデータから知られているのに、発表に消極的なのは何故だろう。
この疑問が確信にかわった。

中世X日、十三湊は一夜にして消えた。

この全てを見ていたものが、今も一人いる。

「文化は一朝にしてできるものではない。遠い昔から流れつづけてきたものが、構造物となって凝縮している。その構造を構成するたるき、瓦、石垣、あるいは小石一つでさえ、それぞれ語をもっている。かれらは、千年、数百年のあいだ、日夜語りつづけ、ときに聴く人を得るとき、はげしくよろこぶのである」

司馬遼太郎「人海・日本の普請／高橋 昇 撮影」序文

「科学では説明つかない不思議な体験が、東北の被災地で次々に語られているという。目の前で水の中に沈んでいった母、がれきの下から見つかった三歳の息子。逝ったはずの人々がある日、悲しみの底にいる家族の前に姿を現す。決してもう戻ってはない。それでも残された人は「元気な様子」に安心し、使者との再会で生きる力を得ていく。」

田玉恵美「NHKスペシャル亡き人との再会 試写室」

人も、構築物も、そこにあつたはずの消えてしまったものは、いなくなってもそこにいる。

☆ ☆ ☆

はるかに流れる天の川は、星になったおびただしい船人たちのヴァルハラのような。くり返す波は悠久の時のねぎらい。浜から続く斜柯松原の元には挽歌の紫陽花が手向けののように生い茂る。

夏の十三湊は不思議な浜だ。

冬の十三湊は雪女のみはるかす茵^{しとね}。

雪の裊と砂の褥のあわせ敷き。

冬が過ぎれば裊は消え、銀色の褥が現れる。

また冬が来て白い裊が褥をくまなく覆う。

十三単^{ひとえ}を靡かせて雪女は

茵の上を舞っていく。探しものでもするのように。

雪女の名をおユキと聞いた。あの風^{ふう}豊、声を忘れない。取材の帰路ふと思った。

おユキは津軽を吹いている、まぼろしの風ではないか。



「幻・十三の湊」2015 汎美展 塩沢慎介

研修報告

*内 容	「これからの美術館事典」鑑賞	研修係
*場 所	国立近代美術館	
*日 時	2015年8月7日	
*参加者	中村 日和佐 久保 久保夫人 照井 中西 大谷 広瀬 小杉(和) 三竹 高木 大野 木虎 相京 島田 (15名)	

メインの「これからの美術館事典」の他に、同じチケットで常陳作品も見られたので当日はかなりの数の作品を鑑賞することができた。

終了後、近くの毎日新聞社ビルの地下でビールを飲みながら（当日は、今夏一番の暑さだった。）2時間位、展覧会の話を中心に楽しい時間を過ごしました。

以下研修参加感想記

平成27年度研修会に参加して感じたこと

相京 三千代

今年度の汎美研修会は8月7日（金）に東京新国立美術館（竹橋）で実施している「No museum, no life? -これからの美術館事典」と題する展覧会を観る事でしたので参加いたしました。

日本国内の国立美術館5館が協力して美術館の構造や機能からテーマを決めてキーワードをA～Zまで抽出し、例えば建築、アーティスト、オリジナリティ、・・・を決めて各美術館が所有する作品を展示したもので、美術館運営の苦勞が感じられる展覧会でした。

作品は良いものが観られ、特にP・クレー、マルセル・デュシャンやセザンヌの作品は私の好みでした。

また、油絵に限らずデッサン、下絵、水彩、版画、日本画等とアートに係わる作品を広く観ることが出来ました。

私の穿った物の考え方かも知れませんが、この展覧会を見て感じたことは、国立美術館が以前は見せなかった運営に関する内情をも展覧会実施のテーマにしていると感じたことです。

ネット時代の到来で現代の若い作家は大きな美術館で展示される事を目指すのではなく小さなスペースを自分好みに構成して展示し、ネットに紹介すれば世界にできる披露できると考える若者が増えているのではと思われます。

国立美術館で収集するに値する力ある作品が見られなくなっているのかもしれませんが。

又、今回の展示テーマで面白かったのは、国立美術館の運営経費の分析で、日本は国費の予算配分が少ないという調査でした。アメリカも歴史が短いのでイギリスやフランスには及びません。やはり、ド・ゴール政権の文化相アンドレ・マルローの居たフランスは断トツでした。知的な事に価値を置く国民性なのかもしれません。

自分勝手な感想となってしまいましたが、今回の展覧会で感じたことは作品の良し悪しが表面立っているのではなく各美術館のもつ問題が強く感じられる展覧会でした。

「これからの美術事辞典」という一風変わったタイトルの展覧会だった。

美術館を構成する要素として36個のキーワード（ハード面、ソフト面含む）を選び、それを事典仕立てでA→Zの順に作品と解説で展開していくという趣向だ。

キーワードによっては解説だけのところや、図や表だけのところもある。

キーワードの一例を挙げると<アーティスト>、<アーカイブ>、<光・照明>、<キュレーション>、<保存・修復>、<イベント>、等、多岐にわたっている。

作品は、日本の五つの国立美術館収蔵作品の中から合計170点選んでいる。

よく知られた作品も多く、それらをただ鑑賞しても、もちろんよいのだが美術館が企図しているのは、それぞれのキーワードのフレームを通して見て欲しいということなのだ。

選んだ作品も国別とか時代順、あるいはイズムごとではなく、あくまでキーワードを中心にセクションごとにまとめられている。視覚（作品）と言語（解説）による一つの場がキーワードの意味を問い掛けてくる仕組みになっている。

例えばキーワード<オリジナル>のところでは、デュシャンの「泉（小便器）」、その他「自転車の車輪」、「ビン乾燥機」、「帽子掛け」等、レディメイドばかり4点展示されている。名前の通り既製品でどこかの工場で大量に作られているはずで、これがオリジナルといえるのかどうか。

事実、「泉（小便器）」は、発表当時（1917年）下品であるとともにオリジナルの欠如を理由に出品を拒否されたという、今とは真逆の評価だった。

ゴヤのエッチングの作品「バルタサール・カルロス王子」他一点は、いずれも下絵にベラスケスの絵を使っている。

ウォホルのシルクスクリーンの作品「4フィートの花」は、身近にある印刷物からの借用と思われる花の図柄を用いて色違いの作品を何枚も刷っている。マルセル・プロータースのシルクスクリーンの作品「署名シリーズ」は、オリジナルを唯一保証する自分のサインを画面いっぱいに図柄として配置した屈折した作品だ。明らかにオリジナルを皮肉っている。

須田国太郎はティントレット作「やそ洗礼図」の模写一点。ルノワールはルーベンス作「神々の会議」の模写一点が展示されている。これらは典型的なコピーだ。

斎藤義重の合板レリーフの作品「トロウッド」は、戦災で焼けてしまった作品を30年後に再制作したものだが、制作当時とは絵具・材料が異なるので、厳密に言えばこれもオリジナルと言えるのかどうか。

オリジナルには原作の、唯一の、独創的な、等の意味があるが、これら計11点の作品はそういう意味ではすべてに？がつく。

ここで、みえてくることは、我々が芸術作品はオリジナルと漠然と信じていることも、そう明白なことではないということなのだ。いわばオリジナルが揺らいでいるのだ。

この中では、マルセル・プロータースとウォホルの作品が60年代の作品で一番新しい。60年代ポップアートの時代にそのような指摘はすでにあったが、80年代に入るとポップのババージョンアップ版のようなネオポップではより過激に一つの手法として自覚的に既存の作品を使っている。

既存の作品に様々な手法で上書きして、自分の作品として署名し発表するというイメージだろうか。

この展覧会では、森村泰昌の「フェルメール研究（3人の位置）」が近いのかも知れない。森村泰昌は有名な人物画の中の人物に自分が扮装してなりすまし、それを写真に撮った作品が多くある。

一寸気になったが、18世紀にゴヤがエッチングの下絵に既存のルーベンスの作品を使ったというのも、今から見ればネオポップ風に見れなくもないと思うが、当時の人はどうみていたのだろうか。

複製技術の発達によるコピーの氾濫や、膨大な過去の作品の影響を考えれば、オリジナル vs コピーの二項対立的な図式は無意味になっているのだろう。

ルネッサンス以降、特に近代において芸術を担保する価値オリジナリティも字義通りの意味ではすでに破綻しているのかも知れない。

今年の夏、オリンピックエンブレムの問題があった。商業美術では商標権の問題等がある為、オリジナリティをめぐる訴訟問題になりコンセプトから制作過程まで詳細に調べたりする事態が起きている。背景には上記のような現実があるからだ。

キーワード<額・枠>のところでは、「絵画が中世の教会等の壁面から離れ、14・5世紀頃タブローとして自立し移動可能なものになった。」と解説にあった。

そう考えれば、ルネッサンス期に作品保護の為の額縁の必要性やそのデコラティブな形態も必然性があった訳だ。

逆に、20世紀になって抽象のシェプトキャンパス（ここではフランク・ステラの「グレー・スクランブル×Ⅱダブル」）では絵の内容と支持体の形を一致させる為、当然画面のエッジが重要になる。ここでは額縁は逆に不必要なものになったのだろう。

作品は地である美術館の白い壁面上の図のような関係になったのだと思う。

キーワード<美術館>のところでは、日本の美術館は博物館法によって規定されていることや、美術館の歴史等が解説されていたが、制度や美術館そのものと作品内容との関係に言及があってもよいのではと思った。

先に記したデュシャンの「泉（小便器）」も美術館という芸術作品を一堂に集めて展示する場所という制度的な前提が共有されていて、初めて意味をもち成立する作品だからだ。

街の衛生機器メーカーのショウウィンドーに展示されているのは、R・Muttと署名されていても問題にはならなかっただろう。

又、美術館の白い壁面は制作する者にとっては意識する、しないにかかわらず、たえず視野に入り対象化する存在だ。白い壁面を何らかの意図で作品に取り込んだ作品は数多い。インスタレーションもその発展系なのではないかと思う。

美術館も、映像作品や特定の場所でしか成立しない作品が増えている中では、現在のよようなホワイトキューブ（出入口だけあって窓のない白い箱）といわれる形態から長いスパンで見れば変わっていくのだろう。

全体的な感想としては、この展覧会自体が美術館を構成する様々な要素を材料とした一つの作品なのだと思う。

どちらかと言うと、いつもは見られている側の美術館が主張し問い掛けているのだ。

感じたことは二つある。強引な解釈かも知れないが、一つは美術館とそこを訪れる人の関

係は双方向的な関係ではないかと言っていること。

二つ目は、キーワード<収集>のところで触れていたが「新しい事物がコレクションに加わるたびに総体としての意味合いが変わり、その都度それを構成する個々の作品の意味合いや役割も変化する。コレクションは増え続けてこそ、その新鮮さが保たれる。」とあったように、将来、仮に美術館の形態等が変わったとしても、このような美術館の機能と手法は継続されていくだろうという確信の二つだ。

だから、「これからの美術館事典」なのだろう。

最後の方に、キーワード<YOU>があった。“ YOUは何しに美術館へ ”と問い掛けられるのかと思ったが、様々な要素の中でも<YOU>なしでは美術館はあり得ないのですよとヨイショしてくれていた。やはり双方向的なのだ。



「NO MUSEUM, NO LIFE? これからの美術館辞典」を観て

中西 祥司

●パンフレットより

テキストにあった<展覧会のテーマ>と<アーティスト>の定義的な解説が適確で面白かったので、そのまま転記しました。

<展覧会のテーマ>

本展は、「美術館」そのものをテーマとしています。美術館の構造や機能から着想を得たAからZまでの36個のキーワードに基づいて展覧会を構成し、これらのキーワードに沿って、事典を思わせる空間構成の中で、紀元前から現代、西洋から東洋までの幅広い時代と地域の作品約170点を厳選して紹介します。そして作品と同時に、美術館の活動に関わる資料も織り込んで展示します。

<アーティスト>

「芸術か、美術家の意。狭義の「職人」とは異なる表現者や創造者としての「芸術家」という存在がこの世で認知されるようになったのは、西洋におけるルネサンス期からである。そして近代以降には、フランスコ・デ・ゴヤの自画像的表象に見られるように、自身のなかに眠る想像力の源泉から内発的に何かを生み出すものこそが「芸術家」とあるとの考えが、より強くなった。しかし20世紀後半からは、そうした近代的な芸術家像の問い直しや解体を、アーティスト自身が引き受けることにもなる。ヴィデオ・カメラをつうじたナルシスティックな視線の循環を問題化したヴィト・アコンチ、過去の芸術作品のなかにみずから忍び込み、「芸術家」は独創的な表現の主体であらねばならぬという通念を皮肉に裏切ってみせた森村泰昌らは、その典型である。そんなアーティストたちにとって美術館は、愛憎入り混じる複雑な感情を抱く場所だろう。彼ら／彼女らは、美術館に作品が収められることを望みもすれば、その権力の及ばない「外」の展示場所——自由出品を原則とする「アンデパンダン展」のような展覧会、また20世紀後半のオルタナティブ・スペースのような場——を求めてもきた。」

●思うこと

展覧会のタイトルからして、美術館の危機感の表れであり、まさに美術館のあり方と今後の対策的な意

図で、独立行政法人国立美術館の5館が企画したものだと思います。国立美術館の一番の問題点は、ルーブルやMoMAに比べると圧倒的に事業収入が少なく、国からの交付金・補助金に頼っているというデータも展示されていました。国からの援助が無ければ、作品の購入も展覧会も開催できない。美術館スタッフの人件費も払えないのです。

印象派や一般的に著名な作家やコレクションには、観客が大勢来るが、それ以外の客足は今一。印象派の作品を持ってくるのにどの位の予算がかかるのか知りませんが、事業収入を見る限りでは、赤字なのでしょう？

いろいろ問題はあると思いますが、私が海外との違いの大きさを感じるのは、美術館が行う教育です。最近、国立近代美術館も学芸員が希望者に解説ツアーを開催していますが、子供時代の美術教育だと思います。例えば、オルセー美術館とかピカソ美術館(パリ)で出合った光景ですが、小学校低学年のグループに学芸員がオリジナル作品を前に解説をし、考えさせ、意見を言わせていました。小さい時から、美術館に行き、オリジナル作品を観ながら、作品にまつわる様々な話を聞く。そういう風に小さい時から、美術館や美術家、美術作品を身近に感じて育った人が多い国と少ない国。それは美術が日常の文化として存在するか否かに大きなギャップを生じさせることになるのは自明です。少なくとも、私の小・中学校時代に美術館に行き、作品の前で専門家に解説を受けることはありませんでした。美術教育とあえて言えば、小学校の修学旅行で日光東照宮を観、中学校の時に奈良と京都の寺院建築や仏像、襖絵などを鑑賞したことは日本美術に直接触れ合う美術教育だったのかと思います。これでは美術を文化とする人は育たないでしょう。

汎美の広告を出稿する媒体を検討するために銀座の書店などの雑誌売り場に行きましたが、美術雑誌の扱いが無い書店の多いことに驚きました。写真雑誌や写真集はどの書店にも置いてありました。美術は現代日本の文化から取り残された存在になってしまったのでは？日常的に接する文化としての美術？今後の美術館の役割の重要性を感じさせられました。

いずれにせよ、我々も美術館を表現の場として、鑑賞者との出会いの場として、もっと活用することに力を入れる必要があると感じました。

権威主義とヒエラルキーに守られて、作品制作が行われている大きな流れが、現代美術を駄目にしていく大きな原因だと思いますが、美術館の役割としては変貌する時代に変化を把握し、時代のニーズに合致した企画運営を望みます。美術雑誌がどこの書店にも置かれるようになることを期待して。

印象的だった作品を一点。

●香月泰男の「告別」



「シベリア鎮魂歌 香月泰男の世界 立花 隆(著)」を読んで、挿入画をみて感銘を受けましたが、今回出会うことが出来て良かったです。追求しつくされた色彩とフォルム、香月さんの凄みのある力強さに圧倒されました。

NO MUSEUM, NO LIFE?

これからの美術館辞典 国立美術館コレクションによる展覧会を観て

大谷 敏恵

作品を見に美術館によく出かけるが、美術館とはどういうものか改めて考えることはなかった。しかし考えてみれば、美術館に行くということは特別なところへ、非日常的なものを求めて行くように思う。人間らしい知的な精神的な好奇心や満足に浸りたい。美術、芸術は人間や社会や歴史の本質であり希求するもの。美術館の存在、役割、使命は様々な文化と美を集めて発信、発掘、創造、伝えること。それは人間の歩みとは何かを、様々な方法で表現、認知、共有するものと思う。この企画展を見て、美術館の幅広い仕事を学んだように思う。

さて、項目の中でAの建築に関して思うところがある。有名な美術館の建物は、歴史的城や邸宅、あるいは現代的な個性的デザインのイメージがある。先日、私は大原美術館に初めて行きました。都会の公共の大きい立派な美術館とは違う雰囲気を感じた。歴史美観地区にあるのだが、美術館が町に日常に自然にとけ込み、人の住む暖かさと安らぐ気持ちになった。緑のツタが這うコンクリートの壁に四角に切った大きくない入口を入ると、ギリシャ神殿風の本館、新館、工芸館、東洋館、茶室など敷地がそう広くない中に様々な建物が続く。いろいろな作品が建物と展示室の意匠の中で落ち着いて親近感を持って見られることを喜んでいるようだった。作品のある場所、見せ方によって作品の放つ魅力は随分と違ってくるものと思った。美術館の芸術を入れる建築は、中と外が一体となって文化を発信して欲しい。ビルの中の美術館には、芸術や作品が展示室のハコの中に閉じ込められているような気がする。

研修の企画展を見て、自分は何故絵を描くのか、何を描きたいのか、発表したいのかと考えた。私は美術館に繋がるために出品しているのだろうか。自分を探して知る自分の作品を最高の空間で、私自身が見たいと思います。

雑 感

8月7日の研修会に参加して

高木 須美

NO MUSEUM, NO LIFE?

これからの美術館辞典 国立美術館コレクションによる展覧会

夏休み中なので中学生の自由研究に合わせた企画かと思いました。それにしても「…?」「これからの…?」……「これからの」はどう解釈したらよいのでしょうか、ある意味で難解でした。又、文字を読みとるのに必死でコレクションをよく観なかったのが

残念、又、作品も少なかった様に思いました。何かもの足りない…という印象でした。

常設展

戦後 70 年ということで戦争前後の作品が多かったです。

オリンピック以前、青山通りを都電が走っているころ、外苑前を通るとき銀杏並木のずっと奥・正面に威風堂々の石造りの建築物が見えて、何だろうと想着っていました。「絵画館」といって戦争画が沢山あるとのこと、近辺に住んでいたののでいつか行ってみたい、それでもわざわざ出向く事も面倒でついに行かずじまいとなっていました。今回たまたま機会に恵まれて観ることが出来ました。

教科書でも見た絵「山下奉文とパーシバルの会見」「アッツ島玉砕」など好き嫌いは別として何かイラストを見ているよう…とても上手に描けていて驚いたのですが、弱い絵でした。国民の戦意高揚と報道が目的だったので自分を描くことが出来なかったのでしょうか。

「ノモンハン」については、中学生の頃一年下に草葉ひかるという生徒が入学してきて、ノモンハンの草葉大尉の遺児である…としばらくの間生徒達の話題になっていました。昭和 14 年、モンゴル・ソ連軍との戦いで日本軍は全滅、悲劇は少女達も知っていました。今ではもう忘れられています。

展覧会鑑賞後の談話会で隣席の木虎さんをご存知なかったです。支那事変も太平洋戦争も月日と共に関ヶ原や西南の役が語られるように物語になってゆく、又戦意高揚のために描かれた戦争画もよく出来たただの絵画として鑑賞されるだけになるのでしょうか。この中のどの絵が残っているのでしょうか？……そんな事を思いながら帰途につきました。

暑い日でした。



8月7日の研修会

三竹 康子

熱中症を案じながら、お堀を巡り竹橋の NO MUSEUM, NO LIFE? 展に。A アーカイブ アーティスト から始め C カタログ から X エックス線 Z ゼロ へと巡ります。これからの美術館活動は？ どう？ いかん？ 国立の5美術館の共催 で開かれたのでした。若い学芸員の熱意と活力を感じて、美術館を 使わせてもらう者には、気持ちの良い展覧会。美術館の仕事の多岐にわたること、時代の記録としての美術品の収集、展示、補修、保管から、観るものへの教育 など、美術館側のお働きのたくさんを「見える化」していただきました。

美術館は「時と共に歩み、映し出し、一般人を教諭する場所」であると感じました。

F Frame 額/枠 L Light 光/照明 Y You あなた の展示が楽しめました。

美術館は衰退してはなりません。

「これからの美術館辞典」を観て

2015年8月7日 東京国立近代美術館

久保 進

36の視座を設定し“展覧会”を考察した企画である。国立美術館が現代の多様化する表現手法に対応すべく、展覧に涙ぐましい努力をしていることが分かる。

私が印象に残ったのは36番目の視座、Zeroである。頑丈に梱包された作品群が山のようになり積み重なり搬送を待っている。その光景は芸術作品とは何かを考えさせられると共に不思議な存在感を示していた。

会員より 一言・二言・三言



久保 進
「流れる」

空間の中に放たれる造形

久保 進

汎美展に足を運ぶようになって8年くらいになる。3年前に三竹さんに勧められて出品するようにもなった。参加を決めた当初は、国立新美術館、東京都美術館という立派な展示会場に恥じない作品が出来るか少々不安もあった。しかし、広いスペースが使える爽快感が凌駕した。

今までは小さな作品を描いては個展で発表してきた。けれど私は建築物、壁画や野外彫刻などのように“空間の中に放たれる造形”をやりたいという夢があった。今こうして汎美展に参加することで具現化できることになった。大きな自由を貰ったと感謝している。

では、なぜ“空間の中に放たれる造形”なのか？そのイメージのルーツを探してみたい。

私は1950年、名古屋で生まれた。私はノンビリ屋でどちらかというとな人で遊ぶのが好きな少年だった。そんな私が今でも鮮烈に思い出すことが二つある。

ひとつは、自動車である。我が家の近くには、国道41号線が走っていた。普段はほとんどといっていいほど自動車の通らない静かな道だ。それでも時々車が走って来る。稀に小型乗用車の「日野ルノー」もやって来る。米軍のジープのような箱形の車やトラックが多い中、カブトムシのような「日野ルノー」は格好が良く目立っていた。

その車を発見すると、鬼ごっこや草野球の最中でもすべてを放り出して一目散に41号線に向かって走り出してしまふ。遠くに豆粒ほどに見えるその車がどんどん近づいて来ると胸の中のメトロノームが急に高速でテンポを刻む。車全体のボリューム、形、色を見逃すまいと全神経を束ねて視覚野に繋ぐ。目の前を疾走する金属の塊、内燃機関、フロントガラスの煌めき、排気ガスの匂いが期待を裏切らない。我に返ると「日野ルノー」の猫背がすっかり遠くに見え、やがて見慣れた風景が戻って来るのだった。

二つ目は、大凧である。小学5年生の頃思い立って、自分の身長程の大凧を作ったことがある。当時はまだ物資が豊かではなかったので、材料をそろえるのが大変だった。母が大事に取っておいてくれたデパートの包装紙や紙紐、竹屋さんで貰った竹を使ったのだ。

小さな角凧とは勝手が違い、作るのは困難を極めた。つぎはぎだらけの、見るから不細工な出来映えになったのを覚えている。もし、この凧が揚がらなかつたら恥ずかしいという不安もあって、人目のつかない早朝を選んで原っぱに向かう。

折よくいつもより強い風が吹いている。辺りに人がいないのを確かめてから恐る恐る、大凧を放つ。白み始めた寒空の中を初めはユラーリ、ユラーリと、そして次第にグングンと揚力を上げていく。夢中になって紐を繰り出す。気がつくときまで経験したことのない、身体全体を持ち上げかねないほどの強い揚力が私を襲っていた。その一瞬、見えるはずのない「風」が見えた。遠く眺めるだけだった“自然”が自身の体内に満たされたように感じたのである。以上が印象に残っている小学生の頃の体験である。このふたつの体験＝「感覚記憶」が“空間の中に放たれる造形”というイメージの基になっている。大きな空間を生かした作品を作りたいという創作動機の出発点でもある。

“空間の中に放たれる造形”とは私にとって“浮遊している色彩と形”を空間に存在する“見えない五線譜”に並べることかも知れない。一瞬の美しい旋律を展示空間や野外空間に定着させ、人間の感覚を揺さぶる状況を創り出す。それが汎美展で目指す私の作品である。

描き始めてまだ・・・。

小林 勢津子

暖かで晴天の2016年のお正月を迎え、汎美展の絵を描かなくちゃ…と。しかもこの汎美だよりの一節もおおせつかりプレッシャー、、、。一気にドンヨリ！

汎美会には昨年会員にさせていただき、先輩方々のお仲間入りしとてうれしいのですが、つたない絵しか描けずお恥ずかしいばかりなのです。

8、9年前、会社勤めを卒業し自宅で仕事をする事となり、少し時間がとれる様になり、新しいコミュニケーションの場と、かねてからアナログチックな油絵を描いてみたいと思い、地域の広報の募集を目にし大辻教室にお世話になる事になりました。何も知らず、ただただ月2回の教室にて、仲間と共に空間を共有し、楽しく大切な時間になりました。しかし、忙しいを言い訳に本を読んで勉強するとか、絵画展に出かけるとかという努力もせず、ただただ教室での時間を楽しんでおりました。

その中で、汎美展のご招待をいただき皆様のイキイキとした自由な表現に刺激され、又、先生の言葉に背中を押され、トライ!! 今年3年目の出展予定となりました。

大きく真っ白なキャンバスを狭い部屋に広げ、さて、、、。

何を…？ モチーフは…？ まずは一筆…？ ナンとナント。パレットに押し出された絵の具を見つめるばかり。数日後、筆のまかせるママに…。キャンバスが色で埋まって行くうちに、樹に見えたり、岳に見えたり、空に見えたり、、、。遠くに聴こえる音たちも

参加して♪♪、だんだん気持ちが入ってきているような？ 筆の感覚と、腕の動きにまかせ、ウネウネと思うままに（どうやら私の右腕くんは曲線が好きかなあ）。

試行錯誤のトンネルの中をさまようばかりで時間切れ。ゴメンナサイー。（>く）
「表現」って？ と。

私は何をきてきて、何を思い、何を考え、何を望んでいるのかしら？

（文章を書くと同じくらい超苦手な分野に突入で一す。）

還暦を過ぎ、壮大なテーマが与えられ、ゆっくり探ってみようかなあ…。なんて思い、いつか何かを見つけられる瞬間が来るかもしれないと、楽しみにしています。どうぞお付き合い程、今後ともよろしくお願いいたします。

入会4年目で感じていること



新海 進

汎美術協会に出品をさせて頂くようになって丸4年がたちました。

その数年前から同時期に開催されていた「日本アンデパンダン展」に出品しておりました。初めて汎美展を見たのは丁度アンデパンダン展の搬入の日に汎美展が開催されていたときでした。

会場に入ってすぐに他の展覧会と違い何とものびのびとした自由な雰囲気「こんな美術会もあるのだ」と感じたことを憶えています。

最初の印象が良く、出来れば出品してみたいと思い案内パンフレットを頂いたのですが応募方法の「公募推薦制」ということがよく分かりませんでした。

知り合いもなく当然推薦してくれる人もいませんでしたので翌年の汎美展で受付の方に応募方法をお伺いしたところ、当時の事務局長でした大辻さんにお話を聞くことが出来ました。

そして作品写真、コンセプトなどを送り翌年から出品させて頂けるようになりました。

入会させて頂いて改めて汎美術協会の良さを実感しております。

作品の制作は本来、全てにおいて自由であると思います。それぞれの感性、思い、思想などから自由に制作し、自由に発表する事。現在様々な美術会が乱立しておりますがその事を認めている美術会は少ないのではないかと感じています。

但し、「自由である」と言うことは「何でもよい」と言うこととは違います。

「何でもあり」と言うことは大変よいことだとは思いますが、それはどんな作品でも展示してよいということではありません。

入会して4年がたちました。

これからも汎美術協会を作品発表の中心にしていきたいと思っています。

私も「汎美の作品」のレベルアップに貢献していきたいと考えています。

簡単ではありませんが、汎美術協会が「本物のアーティスト集団」として質の高い優れた作品の発表の場としての存在感を示せるように力を合わせようではありませんか。

私の絵心

吉澤 浄子

何時の頃からだったのでしょうか、絵を描きたい、と思うようになったのは。

見るのは好きでゴッホ展があれば出むき、モナリザが来たといっちは足を運び、ピカソだモネだルオーだ、と足を運んで鑑賞していたっけ。

自分でも描いてみようか？と思い始めて、絵の具を買い整え、近くの公園の銀杏が輝いていた風景を自己流で描いたのです。今も其の絵は飾っています。

凄く楽しかった、絵を描くのが。

それで市の同好会に入り色々教えて頂いたのです。

その後公募展に挑戦したら？と薦められ出すようになりました。

公募展に出した自分の作品は裸で他人の前に立つようで恥ずかしかったっけ。

それでも、続けていました、家の中で見るのと会場で見るとは大違いですね。

絵の仲間が汎美には長く出品されていて毎年拝見させて頂いてました。

汎美展を見るたびに感動を受けて、何か自分の中にもはじけるような思いがありました。

長く続いていた公募展でしたが違う環境で描いてみたいと思っていた時、汎美のお仲間から出品を勧められて26年春展に初参加させて頂いたのです。

何と我が作品のお粗末な事、発想の貧困さを思い知らされた・・・と言うのが実感です。

自分の作品が嫌になりそうだったけど、模索しながら作品を創って行こうと自分を奮い立たせています。

今迄の公募展では全てお膳立てが出来ていて、入選や受賞などが決められて行きました。

汎美では出品者全員が自分達の手で展覧会を作り上げて行きます、最初戸惑いがありました、

誰しも平等で自分の表現したい事を自由に発表できる、そして会場設営などしていると作者の顔が見えて親近感が芽生え触れ合いが生まれる、そんな会は素晴らしいと思います。

私は5歳位の子どもが描くような絵、あの素直で、軟らかな感性、上手下手ではなく、そんな遊び心の有る絵が描けたらいいな、と思っています。

自分の絵を変えたい、とは思うけど、思うように変える事が出来ないもどかしさがあります。

生き様を変えないと変らないのかもしれないですね。

季節の移ろい、その自然の中でスケッチしているとその中に溶け込んでいるような自分があって、幸せなひと時です。

生活の中に絵心があって良かったなと思います。

汎美の皆さんの作品には毎回目を見張り、こういう表現が出来るのか、こういう手法があったのかあ、こういう素材も使えるのかあ、と毎回驚きの連続です。

線・色・そして形、その魅力にひかれて私はずっと描いていくでしょう。そして汎美という自由な表現が許される場を得て、素晴らしい発想を持たれている方々の作品に尊敬と刺激を受けながら、ずっと続けて行きたい、と思っています。

人生をキャンバスに例えると、あとどんな色が塗れるのだろう、暗い色、溢れる明るい色、どの色も互いを支えて私のキャンバスを埋め続けています。

私の絵の旅はこれからもずっと続いて行くことでしょう。

さあ今年はどんな作品と出会えるでしょう、皆様の作品が楽しみです。

新人もベテランもアマチュアもプロも隔てなく、そんな汎美に出会えて嬉しいです。

お仲間に入れて頂いて有難う御座います。

春秋游吟 抜粋 愚聴風 大辻敦成

寒より寒明けへ、聴風四句八句（四苦八苦）計十二句

天神の絵馬にかをれり寒のむめ

宋中十八日大雪降る四句

武蔵野の深雪に紛ふはるの夢

動きかげ一線裁りて鶴の聲

ささめ雪去りてさ枝に水の珠

雪解けの水音勿勿ゆめ蠢動

むめII梅の古語

小

寒



愚老人

大寒やこほりつきたり星の位置

刻三更 乾坤凍みて微動せず

注「昼気楼」制作・あとりえ四句
掌に重し らうぶに詰まる冬のをと

大寒や 紅蓮覆栽 韻もなし

たぶらうに燃えてつめたし寒の紅

ばれつとに残る白あり寒邪

寒しがり 春立つ今日の風やとく

大寒

三更 深夜の十二時前後、
乾坤 けんこん、天地のこ
と。

紅蓮 深紅。紅蓮地獄の意
もふくめて。
覆栽 ふうさい。天地の意。
たぶらう タプロー、画面
・ 絵画。

立春

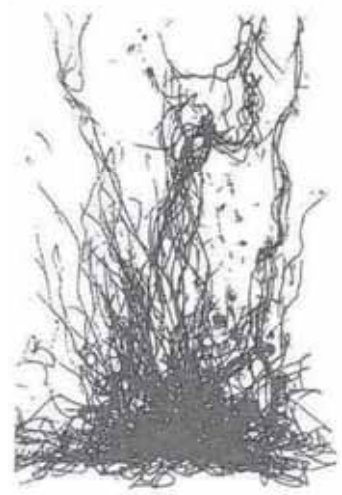
新古今集・紀貫之「袖ひ
らて拍びし水のこほれるを
春立つ今日の風やとくらむ」

編集後記

今年もそろそろ春の女神・佐保姫が汎美展を従えてやってきます。木々の梢は紫だち、日脚も大分伸びました。近くまで来ている佐保姫は寒の戻りに身を縮ませているようでした。おかげさまで「汎美便り」は37号を迎えました。ご投稿の皆様へ感謝。会員諸氏はじめ皆様、ご自愛・ご精進を祈念します。



寒の戻りに身を縮ませる佐保姫？



2016年3月発行

汎美術協会事務局
東京都大田区山王 1-44-11-701 中西祥司方